

COVID-19 感染拡大下における留学生の大学生活について —PAC 分析を用いた質的研究—

石鍋 浩*・安 龍洙**

(2021 年 11 月 8 日 受理)

College Life of International Students under the COVID-19 Pandemic: A Qualitative Study using PAC Analysis

Hiroshi ISHINABE* and Yong Su AN**

(Received November 8, 2021)

要旨

COVID-19 パンデミック以降、あらゆる分野でパラダイムの転換に迫られ、教育機関においても授業形態の見直しなどが模索されている。世界的な移動の制限のため、日本国内で学ぶ留学生にも影響がおよんでいるが、留学生の意識を調査した例は少ない。本研究では、COVID-19 感染拡大下における留学生の意識について質的に検討することを目的とした。2020 年度、日本国内にとどまった留学生を対象に、PAC 分析を実施した。結果、パンデミック以前と以後での留学生の意識の変化が構造的に示された。また、オンライン授業移行への受容の過程の一端も明らかになった。本研究の結果から以下の 2 点が示唆された。(1) パンデミック収束への道筋が見えない中、行動制限下での留学生に対するサポート体制の構築は、数年単位で考えていくべき課題であること。(2) 感染拡大下において、各自ができる範囲で対処しながら生活を送ろうとしていること。

【キーワード】 COVID-19、留学生、非常時サポート体制

1. 背景と目的

COVID-19 は、2019 年 12 月に原因不明の肺炎が報告されたことに端を発し、2020 年 3 月に WHO (World Health Organization) によってパンデミックが宣言された (Ciotti, et al., 2020)。COVID-19 パンデミックは、世界中のあらゆる方面に多大な影響を与え、教育現場でも大きな変革が迫られたことが示されている (Daniel, 2020)。日本においても多くの大学、大学院において従来の授業形態とは異なる方法の模索が報告されている (深川 2020、新藤ら 2021、村田 2021)。

*東大阪大学短期大学部介護福祉学科

**茨城大学全学教育機構

COVID-19 感染拡大下の、留学生に対する日本語プログラムについての報告では、対面授業から遠隔授業への切り替えに伴う教師研修や教材開発などについて問題点などが示されている（深川 2020）。また、深川（2020）は COVID-19 感染拡大初期のように、正確な情報に乏しい時期においては、少数派の留学生の立場や状況まで顧みる余裕は生まれにくかったことを指摘している。オンライン授業受講後の大学院生および教員を対象に実施した意識調査では、留学生や社会人学生などから時間的制約の少ないオンライン授業への好意的な評価がなされ、COVID-19 パンデミックを契機として、新しい教育スタイル試行の重要性が示されている（新藤ら 2021）。オンライン授業に加え、留学生の孤立防止等を目的とした、ボランティア学生によるオンラインソーシャルサポート活動についての報告では、非常時の新しい可能性を持った取り組みであることが示されている（村田 2021）。

COVID-19 パンデミックとは影響のおよぶ期間や範囲など異なる点もあるが、日本では 2011 年の東日本大震災が類似する非常時の例と考えられる。当時、留学生を対象とした調査も行われており、情報弱者としての留学生への物理的および心理的サポートの重要性が指摘されている。（米倉 2012、正宗 2013、松本・小笠恵 2011、王・仙波 2012）。非常時におけるサポート体制の構築は、留学生に関わる我々教員が、常に念頭に置いておくべき課題の 1 つである。

COVID-19 パンデミックに由来する危機状況における留学生を対象とした調査も始まりつつあるが限定的である。留学生の心理・社会的支援についての検討では、対象が短期滞在の留学生だった（西浦 2020）ため、個々の留学生のパンデミック当時の意識までは明らかになっていない。中国人留学生を対象とした、新型コロナウイルス感染防止対策と知識に関する調査では、感染防止対策の実施に個人差が見られたことを通し、指導対象の把握に役立ったことが示されている（高・大谷 2020）。留学生が抱える困難と課題についての調査では、講義や学習形態の変化、就職や進路に対する不安、コミュニケーション機会の不足、国や家族との関係、そして日本に居住している不安の 5 つが主要な不安として示されている（高橋 2021）。

WHO によるパンデミック宣言（Ciotti, et al., 2020）から 1 年半余りの決して長くない期間ではあるが、各機関と研究者が未知の状況に対応しようとしていたことが先行研究から窺える（深川 2020、村田 2021、西浦 2020、高・大谷 2020、高橋 2021）。しかしその一方で、感染拡大下において、個々の留学生にどのような意識の変化が起きていたのかについての報告は少数である。先行研究で示された、教育機関に焦点を当てた研究に加え、個々の留学生に焦点を当て、感染拡大下における彼らの意識を明らかにしていくことが残された課題の 1 つである。また、非常時一般において、留学生に対しどのようなサポートが必要なのかも不明な点が多い。地震等の災害に加え、感染症拡大という、これまで想定されにくかった非常時における留学生の意識とサポート体制の検討も残された課題である。そこで本研究では、COVID-19 感染拡大下における留学生の大学生生活の意識について質的に検討することを目的とした。

2. 方法

日本の大学、大学院で学習・研究する留学生 4 名を対象（対象 A から対象 D）に、PAC 分析を実施した。PAC 分析は多変量解析を取り入れ、少数事例に関する詳細で客観的な分析を行う手法であり、連想刺激の操作的手続きにより、対象の内面へのアプローチや被験者自身の問題について気づきをもたらすことなども可能である（内藤 1997）。PAC 分析を用い、留学生の意識の構造についての検討も多く行われ、外国人の滞在歴が対日観に与える影響や外国人の対日観の変容など

についての検討が行われてきている（安 2009、安 2010a、安 2010b、安 2011、安・池田 2012、安 2012、安 2015、安 2016）。

本研究への協力に当たり、研究の目的、研究協力の任意性、匿名化によるプライバシーの保護、協力同意撤回の自由について、対象に文書および口頭で説明し同意を得た。対象が特定されることを回避するため、出身地域、性別、年齢等が推測されうる箇所は削除、あるいは伏字とした。

研究は第 1 部の質問紙調査と第 2 部の口頭調査から構成した。第 1 部の質問紙調査では、以下の刺激を与えイメージ項目を質問紙に記入するよう教示した。イメージ項目記入は 10 個以上になるよう教示した。

【刺激文】あなたは「コロナ禍での大学生活」に対してどんなイメージを持っていますか？ あなたが「コロナ禍での大学生活」を考える時に重要と思われる順番に下の「イメージ表」に 10 個以上記載してください。イメージは、単語（例：優しい、寒い）、または短い文（例：日本の冬は寒い）で書いてください。

対象が記入した連想イメージを重要と思われる順序に並べるよう教示した。次に、各順位のイメージ項目の組み合わせが、直感的イメージでその意味内容においてどの程度近いか 7 段階尺度で評定するよう教示した。評定結果に対し対象ごと個別にクラスター分析（Ward 法；HALBAU for Windows Ver. 6.24 使用）を実施した。第 1 部の調査は、第 2 著者が 2021 年 2 月に実施した。データ解析も第 2 著者が実施した。

第 2 部の口頭調査において、(1) 各クラスターおよびクラスター全体の解釈、(2) 各イメージ項目に対してそのイメージを抱くようになったきっかけやパンデミック後に変化したことなどについて尋ねた。第 2 部の口頭調査は、第 2 著者が実施した。

第 1 部の調査と第 2 部の調査で得られた結果に対する解釈を第 1 著者と第 2 著者間で行った。形成されたクラスターを中心に次の 2 点について検討した。

- (1) 留学生は感染拡大下の大学生活をどのようにとらえているか
- (2) 感染拡大下において留学生はどのような問題点を抱えているか

3. 結果

クラスター分析の結果、各対象からデンドログラムが得られた。以下、対象 A から対象 D のデンドログラムを示す（図 1 から図 4）。図 1 から図 4 のデンドログラムの縦軸は連想項目順位、横軸は連想項目間の距離を示している。各連想項目の内容、連想項目イメージ、各クラスターの解釈がデンドログラム内に示されている。

デンドログラムの提示に続き、各クラスターについてインタビューを行った際の発話スクリプトを斜体字で示す。発話スクリプト内では、対象が特定されうる固有名詞などは削除した。発話スクリプト内に丸括弧で示した部分は、インタビューアーの発話である。なお、連想イメージおよびスクリプトの一部に文法的誤用が含まれるが、文意を損なわない限りそのまま記載した（以下同様）。

3.1. 対象 A の結果

図 1 は、対象 A のクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象 A は 10 個の連想

イメージを3つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位2、6の2項目であった。クラスター2は1、3、9の3項目であった。クラスター3は4、5、7、8、10の5項目であった。

以下の斜体字で示した箇所は、図1を対象Aに提示しながらクラスター1についてインタビューを行った際の発話スクリプトである。クラスター1は、2. 電気代が増える、6. 冬が寒い2項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「意外な冬の生活」とした。

家にはフロアで自動で熱とかありますので、エアコンとか日本に来た後は、どんどん使えてになっていく。いきなり電気代が高いので、4000円ぐらいでちょっとびっくりしましたので。あとは、今年もコロナの時期がほとんどオンライン状況になって電気代とか、さらに増やしている。ちょっと困っている。

クラスター2は、1. 収入が下がる、3. オンライン授業、9. 先生が優しいの3項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「留学生生活の変化」とした。

今年はコロナのせいで、ちょうどアルバイト先は営業時間が減少してるので、私も給料とかどんどん減少していく感じで。あとオンライン授業は私は時々途切れしてる所とか。あとはネットの調子が悪いところがあって、先生が全然気にしないので、優しいと思います。

変わっているところは、家に戻ったらすぐに消毒とか。全部服とか触っているものとか全部消毒して、結構、面倒くさいと思います。

クラスター3は、4. 帰国できない、5. 旅行できない、7. 毎日消毒、8. 日本料理が慣れていない、10. 風景が綺麗な5項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「行動の制限」とした。

日本にこの2年間留学してる間は、日本料理とかあまり慣れていないので、ある程度1年間に1回、2回ぐらい帰国しないとイケない。(それは中国料理を食べるために帰国するんですかね。) そうですね。中国の東北とか南とか料理が全然違うので、いろんな料理を楽しみたいと思っていますので。今は旅行できないし、帰国もできないし、大変だなと思っています。日本は街とかすごくきれいで、風景とかすごくきれいで、そういうところがいいと思いま

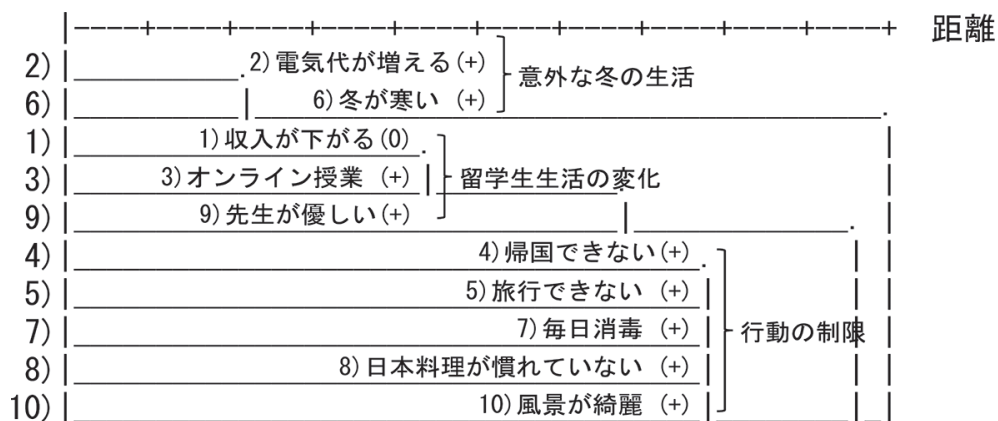


図1. 対象Aのデンドログラム

すが、やはりその料理が中国人として食べ物が一番重要だと思いますので。

3.2. 対象 B の結果

図2は、対象Bのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Bは12個の連想イメージを3つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、2、12、8の4項目であった。クラスター2は3、4、7、11の4項目であった。クラスター3は5、10、9、6の4項目であった。

以下の斜体で示した箇所は、図2を対象Bに提示しながらクラスター1についてインタビューを行った際の発話スクリプトである。クラスター1は、1. コロナ禍での大学生活、2. コロナ禍での学校以外の生活、12. 留学生たちとの交流が少なくなったので先学期の生活が懐かしい、8. ホームパーティーも楽しいの4項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「留学生の生活」とした。

これは、コロナ禍での外国人留学生が、日本にいる生活の全体です。この内容は特に、留学生と他の日本人の学生と違う生活のイベントとか、それです。(留学生が置かれている環境は、日本人学生と、どのように違うと思いますか。) まずは、留学生は、留学生同士と共有することが多いです。留学生同士は自分のネットワークがあります。このネットワークで留学生たちは自分のホームパーティーとか、それがやります。自分の国にいるより、友達が少なくなったと思います。コロナ禍で知り合った人も少なくなりました。自分の国より日本では、あんまり自分の意見が、よく出てきません。ですので、友達をつくることも難しいと思います。

クラスター2は、3. 家から出ないので安らぎを感じる、4. しかし時々うっとうしい、7. スーパーで買い物するとき楽しい、11. 新しいスキルができたのでうれしいの4項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「生活の変化」とした。

学校以外の生活と思いますが。家から出ない、このことさっき話しましたが、3番、主に、変わらない生活、3番と4番は、主に今の生活は、変わらない。毎日、ほぼ同じですので、こ

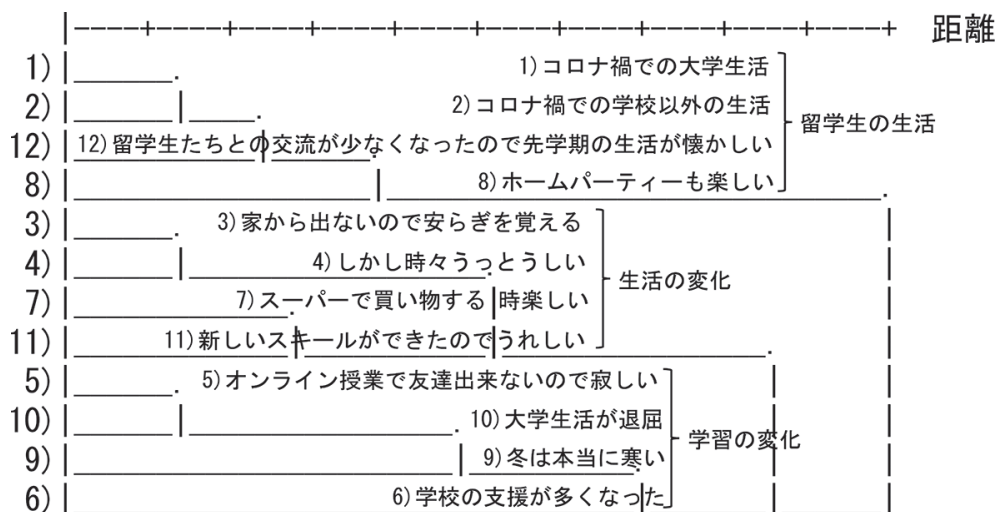


図2. 対象Bのデンドログラム

のように感じました。(ちょっと見たら、安らぎと、うっとうしいという、反対の意味のように見えるんですけども、両方の気持ちがあるってということなんですね。) 安らぎは、今の変わんない生活に対して、毎日、明日の生活を予想できるので。はい。うっとうしいのは、自分が今、1人暮らし、そして毎日、他の人と交流しないです。他の人は、どのような生活をしているか、よく分かりません。自分と他の人の差別も、よく分かりません。例えば、修士論文が今のしん……。進捗状況は、他の人より早くない。進捗状況は、そんなに良くないですが、あと、そのような疑問もよく出ました。

他のイベントもないです。スーパーで買い物をするときは楽しい。もっと楽しいと思います。毎回スーパーに行くとき、売っているものは違う。変化すると思います。この変化は今の生活で面白いことになりました。多分、コロナ前は違うと思います。コロナ前のスーパーの中で売っているものが変わったことに対して、困る感じかもしれません。何が買いたいけど、スーパーでは多分、売っていない。

クラスター3は、5. オンライン授業で友達出来ないのが寂しい、10. 大学生活が退屈、9. 冬は本当に寒い、6. 学校の支援が多くなったの4項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「学習の変化」とした。

大学生活、●●大と関連性がある生活。普通の大学生活がよく分からないです。その前には交換留学生、院生または大学生の生活も大きな差別が感じましたが、今回、●●大で留学するときは、普通の日本の学生生活を過ごしたいです。今もう、できなくなりました。6番は、コロナのために、多分、コロナ禍でみんな、いろいろな生活困難が出ました。私は特に、(人間関係) 人間関係しか困難がないですが、バイトも入れてやる。経済状況も、そんなに問題がないです。でも、多分、他の学生は、いろいろな困難が出ましたので、学校の試験が多くなったそうです。これは多分、コロナ時期の他には見えないことです。珍しいと思います。

3.3. 対象Cの結果

図3は、対象Cのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Cは11個の連想イメージを4つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、3の2項目であった。クラスター2は7、8、9の3項目であった。クラスター3は2、12、4、6、11の5項目であった。クラスター4は5、10の2項目であった。

以下の斜体で示した箇所は、図3を対象Cに提示しながらクラスター1についてインタビューを行った際の発話スクリプトである。クラスター1は、1. オンラインの授業、2. 化粧はいらぬの2項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「最も大きな変化」とした。

これは、コロナ後、その感じが強い。その変化があるので、書きました。(具体的に、どのような感じを受けていますか。) その前は、全部、対面授業なので、対面授業のとき、女性として化粧する機会が多いので。でも、オンラインの授業は、化粧の場合は減りました。その1と3の関係が強い感じがあります。その前は、オンラインの授業は全然受けたことがないので、1番大きな変化だと思います。今の状況なので、私はオンラインの授業は、多分もっと安心がってきます。外にも行けないので、そして感染の……。 (心配。) 可能性が減りました。

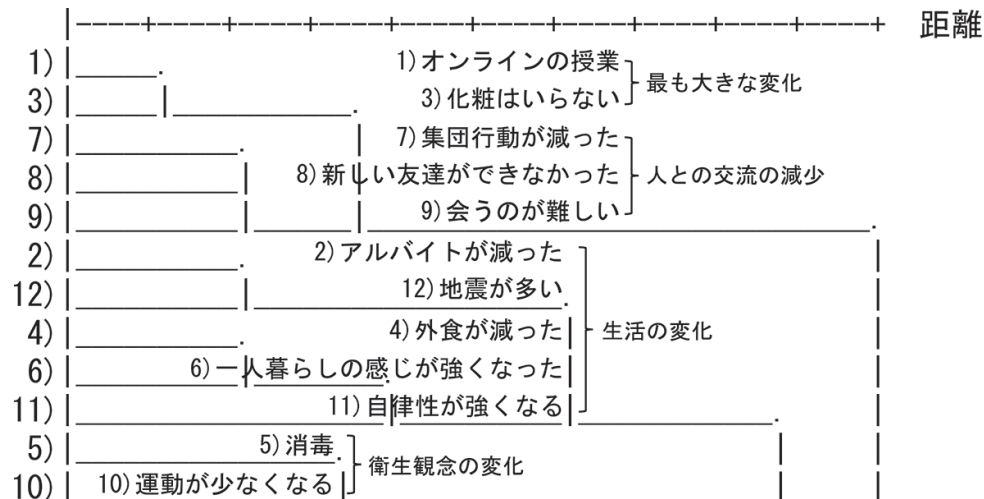


図3. 対象Cのデンドログラム

そうです。

クラスター2は、7. 集団行動が減った、8. 新しい友達ができなかった、9. 会うのが難しいの3項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「人との交流の減少」とした。

そのグループの内容も、多分、関連が強いので、私は去年の新入生なので、大学院生の新生生なので。でも、去年は、全然他の学生は見たことがないので。そして、集団行動もほとんどないので、新しい友達できません。会うことが難しいので、この感じが強いと思う。(新しい友達ってというのは、主に日本人とか。) 中国人もある。でも日本人もある。日本人、去年は全然見たことがないので。今も会うのが難しいので、いつも1人なので、ちょっと寂しくなりました。そして、外食があるとき、1人なので寂しい感じが強いです。

クラスター3は、2. アルバイトが減った、12. 地震が多い、4. 外食が減った、6. 一人暮らしの感じが強くなった、11. 自律性が強くなるの5項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「生活の変化」とした。

これは、ほとんど大学生活以外の自分の生活の感じです。私は、飲食店、コーヒー店でアルバイトしていましたので、短期営業、自分のアルバイトの時間も減りました。そして、中国で両親がとても心配なので。そして自分も、自ら、アルバイトの時間も減りました。(ご両親も、アルバイトの時間を減らしなさい、とそういうふうに言っているんですか。) 不安なので、そうですね。1人で家でいますとき、周りが静かです。その静かなとき、突然、地震が来るので。その後、毎日、そんなに強くない地震もありますよね。そのときも地震の感じが強くなりました。(また大きな地震が来るんじゃないか、と心配になるという。) そうです。1人で住んでいますので。去年、自分の生活で1番の感じです。これは、毎日、自分のスケジュールも作って、何時から何時まで授業がある。何時から何時まで自分の宿題を書く時間。自分がこのように進んでいますので。自分が1人暮らしの感じも強くなりました。

クラスター3は、5. 消毒、10. 運動が少なくなるの2項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「衛生観念の変化」とした。

コロナの前は、多分、1週間、3回4回くらい運動がやっていました。でも去年は、ほとんどやりませんでした。そして、5番は、今は外から家に帰るとき、毎回消毒します。そして、スーパーで買ったものは、全部消毒します。そして私は安心ができますので、消毒は毎日やっています。この感じが強いと思います。コロナは、大学の生活も自分の生活も、大きな影響を及ぼしました。でも今は、1番重要なイメージは、オンラインの授業なので、でも今は慣れました。この生活もだんだんうまくいきました。コロナの下のこのような生活も、もう慣れました。

3.4. 対象Dの結果

図4は、対象Dのクラスター分析から得られたデンドログラムである。対象Dは11個の連想イメージを3つのクラスターに分類した。クラスター1は連想項目順位1、6、9の3項目であった。クラスター2は2、8、5、3の4項目であった。クラスター3は4、7、10、11の4項目であった。

以下の斜体で示した箇所は、図4を対象Dに提示しながらクラスター1についてインタビューを行った際の発話スクリプトである。クラスター1は1. 対面授業はできない、不便、6. 視力、肩などの不調、9. 運動不足の3項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「健康面の変化」とした。

このAのグループは、私にとって健康についてのグループです。健康大事。コロナ前で、対面授業で運動もできて学校に行って、チームもあってよく使っていくけど、対面授業ができないから、オンライン授業で、ずっと家でパソコン見て、運動不足になって、思いました。そして、視力とか肩とかずっと座ってるから、不調な感じがします。他は、1番のところで対面授業できない、不便の感じは、オンラインでたくさん学生がいますから、人の表情はあんまり見れないから、言い方の表情を見て、ちょっと残念で、オンラインで顔は見えないから、新しい友達はできてない。ずっと周りは中国の友達知ってますけど、授業で日本人の学生たちも友

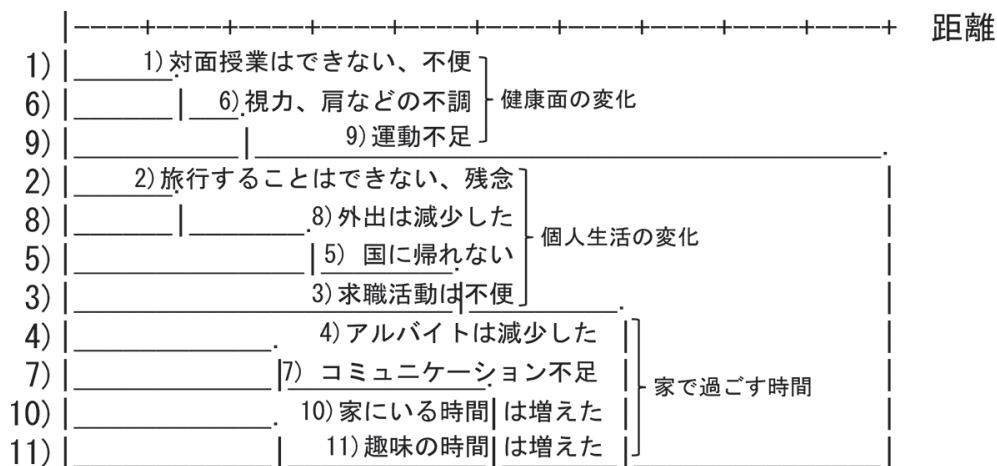


図4. 対象Dのデンドログラム

達になりたいと思ってるけど、オンラインでやっぱり無理かなって思いました。

クラスター 2 は、2. 旅行することはできない、残念、8. 外出は減少した、5. 国に帰れない、3. 求職活動は不便の 4 項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「個人生活の変化」とした。

個人的な生活って思っています。コロナ前は日本に来ていろんな所を旅行したい、だからコロナ前で、いろんな所を旅行して、今は、学校は●●大学だから●●(地名)の所でよく行きますけど、●●(地名)の所はまだ行ってないです。そして、コロナ前で実際は 2021 年の 12 月のとき、休みのときも友達で約束で、●●(地名)に行きたいって約束しましたが、コロナで感染人数多いから行けなくて。これは一つ、旅行のところはコロナの後ほとんど山とか海とか、広い所で行くけど、回数が少ない、になりました。だからコロナで仕事探すのは不便で。●●(地名)に就職したいから。でもコロナで●●(地名)の感染人数が一番多いから。

クラスター 3 は、4. アルバイトは減少した、7. コミュニケーション不足、10. 家にいる時間は増えた、11. 趣味の時間は増えたの 4 項目であった。インタビュー結果から、クラスター名を「家で過ごす時間」とした。

自分にとってリラックスの影響があります。まずは、コロナ前はバイトが週 3 回、毎回は 3 時間とか 4 時間とか入ってます。コロナの後は、自分も気持ちがちょっとコロナ怖いなって、少し減少して、だからコロナ後は週 1 回だけ、3 時間とか 4 時間とか入ってます。減少しました。そして、コロナでずっと家にいて、人とのコミュニケーションもできないし、さっきも A グループも、対面授業ができない、日本人の友達たちもできてないから、ずっと 1 人で部屋にいて、コミュニケーション不足になって思いました。コミュニケーション不足は、これは日本語のコミュニケーション不足って思っています。中国の友達とか、家族とか、テレビ電話、用事があったらテレビ電話で話しますが、やっぱり日本にいるから日本語を日本人と話したい。

4. 考察

本研究では、COVID-19 感染拡大下における留学生の大学生活の意識について、PAC 分析を用いて質的に検討することを目的とした。表 1 は対象 A から対象 D のクラスターの一覧である。以下に示したように、パンミック下において以前とは大学生活が大きく変わったと、各対象が感じていることが読み取れる。

表 1. 対象 A から対象 D のクラスターの一覧

対象	クラスター 1	クラスター 2	クラスター 3	クラスター 4
対象 A	意外な冬の生活	留学生生活の変化	行動の制限	—
対象 B	留学生の生活	生活の変化	学習の変化	—
対象 C	最も大きな変化	人との交流の減少	生活の変化	衛生観念の変化
対象 D	健康面の変化	個人生活の変化	家で過ごす時間	—

- (対象A) 変わっているところは、家に戻ったらすぐに消毒とか。全部服とか触っているものとか全部消毒して、結構、面倒くさいと思います。
- (対象B) そして毎日、他の人と交流しないですので、他の人は、どのような生活をしているか、よく分かりません。
- (対象C) その前は、オンラインの授業は全然受けたことがないので、1番大きな変化だと思います。
- (対象D) 1番のところで対面授業できない、不便の感じは、オンラインでたくさん学生がいますから、人の表情はあんまり見れないから、言い方の表情を見て、ちょっと残念で、オンラインで顔は見えないから、新しい友達はできてない。

本研究では、(1) 留学生は感染拡大下の大学生活をどのようにとらえているか、(2) 感染拡大下において留学生はどのような問題点を抱えているか、の2つの問いを立てた。以下、2つの問いに関して考察する。

4.1. 留学生は感染拡大下の大学生活をどのようにとらえているか

COVID-19 パンデミック以降の状況は、日本における留学生を取り巻く非常事態として2011年の東日本大震災に匹敵する状況であるとも言える。震災後の留学生の状況を検討した先行研究では、情報へのアクセスの困難(米倉2012、正宗2013)、震災後も留学先である日本との繋がりを維持したいと希望する留学生がいる一方、現実的には日本と疎遠になる留学生がいる傾向が見られたことが示されている(松本・小笠恵2011、王・仙波2012)。以下の引用に示した通り、COVID-19 感染拡大下では帰国による一時避難ができない点や友人と対面での情報交換ができない点などが、震災時とは大きく異なる点と考えられる。

- (対象A) 日本にこの2年間留学してる間は、日本料理とかあまり慣れていないので、ある程度1年間に1回、2回ぐらい帰国しないとイケない。(それは中国料理を食べるために帰国するんですかね。) そうですね。
- (対象B) 自分が今、1人暮らし、そして毎日、他の人と交流しないですので、他の人は、どのような生活をしているか、よく分かりません。
- (対象C) 全然他の学生は見たことがないので。そして、集団行動もほとんどないので、新しい友達ができませぬ。会うことが難しいので、この感じが強いと思う。
- (対象D) コロナでずっと家にいて、人とのコミュニケーションもできないし、さっきもAグループも、対面授業ができない、日本人の友達たちもできてないから、ずっと1人で部屋にいて、コミュニケーション不足になって思いました。

COVID-19 感染拡大下において留学生が抱える困難と課題について検討した研究においても、留学生はオンライン授業、友人と会う機会の減少、帰国ができないなどの点に困難を抱えていることが示されている(高橋2021)。オンラインへの授業形態の転換や人との交流の途絶に加え、行動制限により帰国できない状況が留学生の大学生活において大きな位置を占めていると考えられる。日本人学生においても、国内移動制限により帰省不可、または逆に居住地から進学先に転居できないなどの問題が生じた。パンデミック収束への道筋が見えない中、行動制限下での留学生に対するサ

ポート体制の構築は、数年単位で考えていくべき課題であると考えられる。

一方、震災時に指摘されていた情報弱者としての留学生（米倉 2012、正宗 2013）の一面は、本研究におけるクラスター構造やインタビュースクリプトから窺うことはできなかった。対面による交流の制限があったことへの訴えはあったが、情報にアクセスできないことが原因となる問題の指摘は認められなかった。2011 年当時の情報収集源はテレビが主流（米倉 2012）だったのに対し、SNS 等が世界的に普及し、どこにいても必要な情報が手に入るようになったことが大きい要因の 1 つであると推察される。10 年間の情報通信技術や社会構造の変化を反映していると考えられる。

4.2. 感染拡大下において留学生はどのような問題点を抱えているか

本研究の結果、留学生が抱える問題点と認められるのは、行動制限により帰国ができないという点であろう。日本人学生も国内の行動制限による問題が発生していたことは推察できるが、留学生は国をまたいだ行動制限の影響を受けて、それに対する問題を抱えていた。これまでの震災等の自然災害とは異なる、留学生が抱える新たな問題点であると考えられる。その他、オンライン授業や人との交流の途絶など（高橋 2021）が指摘されているが留学生特有とは言い切れない。

高橋（2021）で指摘されている感染拡大下で留学生が抱える困難は、本研究でも同様の傾向が認められた。その一方、「留学生は限られたリソースを十分に活用し、自分の人生設計について考え、健康管理や家族との情報のやりとり、節制など、困難な中でも日本の生活を送っており、『研究者が作り上げたかわいそうな学生ではない』（高橋 2021）」と示されているように、本研究の結果においても、対象が状況を冷静に受け止め、柔軟に対応しようとしている傾向が窺われた。

（対象 B）他のイベントもないですので、スーパーで買い物をするときは楽しい。もっと楽しいと思います。毎回スーパーに行くとき、売っているものは違う。変化すると思います。この変化は今の生活で面白いことになりました。

上の対象 B の発話からも窺えるように、感染拡大下において、各自ができる範囲で対処しながら生活を送ろうとしている意識の構造を反映していると考えられる。COVID-19 感染拡大下における留学生の意識の質的側面の一端を示していると考えられる。

5. 結論

本研究では、COVID-19 感染拡大下における留学生の大学生活の意識について、PAC 分析を用いて質的に検討することを目的とした。検討にあたり設定した 2 つの問いに対し、以下の示唆が得られた。

(1) 留学生は感染拡大下の大学生活をどのようにとらえているか

オンラインへの授業形態の転換や人との交流の途絶に加え、行動制限により帰国ができない状況がクラスター構造として認められた。本研究の対象はこれらの点を、パンデミック以前との大きな違いと捉えていると考えられた。パンデミック収束への道筋が見えない中、行動制限下での留学生に対するサポート体制の構築は、数年単位で考えていくべき課題であると考えられた。

(2) 感染拡大下において留学生はどのような問題点を抱えているか

日本人学生も行動制限を伴う中、帰国の制限を受ける点が留学生特有の問題であると考えられ

た。その一方で、困難な状況の中でも柔軟に対応しようとする傾向が窺われた。従来の留学生像を見直す契機となりうると考えられた。

本研究では、少数の留学生を対象に COVID-19 感染拡大下の大学生活に対する意識について質的に検討した。今後、対象を増やし量的な検討も行う必要がある。このような調査を重ねることにより、数年後の留学生サポートにとって貴重な資料となりうると考えられる。継続的な調査が必要であると考えられる。

謝辞

本研究は、日本学術振興会学術研究助成基金助成金基盤研究 C (課題番号: 17K02838、研究代表者: 安龍洙) の助成を受けた。

引用文献

- 安龍洙 (2009) 「外国人の対日観に関する研究－韓国人短期留学生の場合－」 茨城大学留学生センター紀要 7, 1-13.
- 安龍洙 (2010a) 「外国人の対日観に関する研究－中国人短期留学生の場合－」 茨城大学留学生センター紀要 8, 1-17.
- 安龍洙 (2010b) 「外国人の対日観に関する研究: 日本滞在歴の長い韓国人の場合」 ユーラシア研究 7(4), 373-392.
- 安龍洙 (2011) 「外国人の対日観に関する研究－ベトナム人留学生の場合－」 茨城大学留学生センター紀要 9, 1-18.
- 安龍洙・池田庸子 (2012) 「日本人の外国・外国人観に関する研究－茨城県在住の主婦の場合－」 茨城大学留学生センター紀要 10, 15-28.
- 安龍洙 (2012) 「外国人の対日観に関する研究－中国の少数民族出身者の場合－」 茨城大学留学生センター紀要 10, 1-14.
- 安龍洙 (2015) 「日本留学経験者の韓国帰国後の対日観の変化に関する一考察」 茨城大学留学生センター紀要 13, 1-14.
- 安龍洙 (2016) 「日本で就職した元韓国人留学生の対日観の変化に関する一考察」 茨城大学留学生センター紀要 15, 93-105.
- 王敏東・仙波光明 (2012) 「東日本巨大地震が留学生に与えた影響－地震 1 年後のインタビューを通して－」 言語文化研究 20, 163-184.
- 高誉文・大谷順子 (2020) 「新型コロナウイルス感染防止対策・知識に関する調査研究－大阪大学における中国人留学生を例にして－」 大阪大学高等教育研究 9, 13-30.
- 進藤優子・人見英里・岩野雅子 (2021) 「ブレンド型 e ラーニング大学院教育の可能性－新型コロナウイルス感染症防止に伴う遠隔授業の事後調査分析から－」 山口県立大学学術情報 14, 57-75.
- 高橋朋子 (2021) 「『オール近大』新型コロナウイルス感染症対策支援プロジェクト」におけるアンケートならびにインタビュー調査の結果から－留学生が抱えた困難と課題－」 近畿大学教育論叢 33(1), 173-195.
- 内藤哲雄 (1997) 「PAC 分析の適用範囲と実施法」 人文科学論集 31, 51-88.
- 西浦太郎 (2020) 「危機状況・パンデミック下での留学生とのカウンセリング・コミュニケーションに関する一考察－新型コロナウイルス (COVID-19) 感染症が留学生の相談体制に与えた影響とその対策から－」 甲南大学学生相談室紀要 28, 49-61.
- 深川美帆 (2020) 「コロナ禍における総合日本語プログラムの遠隔教育－国際交流と言語教育を止めないための取り組み」 金沢大学国際機構紀要 3, 73-89.
- 正宗鈴香 (2013) 「東日本大震災における外国人・留学生の情報収集活動とコミュニケーション行動－対面インタビューから見てきた大学における危機管理対策－」 麗澤大学紀要 97, 63-86.
- 松本明香・小笠恵美子 (2011) 「震災後の日本で留学を継続する背景－留学生へのインタビューを通して－」 日本語教育方法研究会誌 18(2), 34-35.
- 村田晶子 (2021) 「孤立する留学生のオンライン学習支援とソーシャルサポート－コロナ禍でのボランティア学生の取り組み－」 多文化社会と言語教育 1, 14-29.
- 米倉律 (2012) 「災害時における在日外国人のメディア利用と情報行動: 4 国籍の外国人を対象とした電話アンケートの結果から」 放送研究と調査 62(8), 62-75.
- Daniel, Sir J. (2020) Education and the COVID-19 pandemic. PROSPECTS 49, 91-96.
- Ciotti, M., Ciccozzi, M., Terrinoni, A., Jiang, W. C., Wang C. B., and Bernardini S. (2020) The COVID-19 pandemic. CRITICAL REVIEWS IN CLINICAL LABORATORY SCIENCES 57(6), 365-388.